

## 研究者を育てる教育者 — 必要な情報を惜しみなく —

野々口 ちとせ

佐々貴義式先生に初めてお会いしたのは、私が修士課程の1年生の夏でした。オーストラリアのシドニーにあるニュー・サウスウェールズ大学で日本語教育研修を受けたとき、そこで初級の日本語教育を担当なさっていたのが佐々貴先生でした。そのおよそ半年後に、今度は第二言語習得研究の担当教員として、佐々貴先生がお茶大にいらっしゃいました。新しく着任された佐々貴先生の授業を正式に履修できるのは、私の一つ下の学年からとなり、私は残念ながら履修できませんでしたが、佐々貴先生は「おためしクラスをつくりましょう」とおっしゃって、様々な学生が参加できる場を持ってくださいました。そこでは、先生が教壇の横に少しもたれるように立って、学生の話聞いていらっしゃいました。その姿勢がくつろいで議論しようと学生に呼びかけていらっしゃるようで、大変新鮮でした。学生が各々知っていることを緊張せずに出し合えるような問いかけで、謙虚に耳を傾けながら疑問に思うことは臆せず問う態度を、身をもって伝えてくださっていたように思います。

その後、私はお茶大の日本語教育コースで6年間働くことになりましたが、その間に先生はコース主任になられ、ますますお忙しくなられました。助手室にいらっしゃると、京都がご出身の佐々貴先生は関西弁で、神戸生まれの私に、あり得ないような仮定のお話や冗談をよくおっしゃいましたが、今思うと、そんなおしゃべりで頭と心のストレッチをなさっていたのかもしれない。お茶大という職場で、私は佐々貴先生のお茶目な面に接することが多くなり、それは先生がご病気になられてからも変わりませんでした。先生はご自身のご病気について語ることを避けていらしたようでしたので、私も自分からおたずねすることは控えました。学食で夕飯をご一緒したときなどは、これまた関西弁でテレビドラマや野球の話などをなさって、娯楽でも幅広い情報収集とこだわりの一面を披露していらっしゃいました。お仕事では、精力的に学生の研究を支援なさっていたお姿を思い出し、遺されたWebサイトに細々と書き込まれた膨大な情報を見るにつけ、私も研究についてもっと真剣にご相談すべきだったと今になって悔やんでおります。事務作業でも研究についてでも、佐々貴先生は、いつもその場で必要な情報が何かをとっさに判断し、惜しみなく教えてくださる存在でした。先生のWebサイトは、時空を超えて今も多方面にわたる貴重な情報を提供し続けています。表現豊かで、言葉の選択に独自のセンスを込める(少し早口な)佐々貴先生の語りには、インターネットで世界のどこからでもアクセスできます。

まだ悲しみは癒えませんが、佐々貴先生の、情報を活用・共有しながら謙虚に探求を続けていらしたお姿を追って、私は研究を続けてまいります。アイデアに詰まったら天を見上げますから、そのときは関西弁で茶々を入れてくださいね。

ののぐち ちとせ/東京国際大学 言語コミュニケーション学部